

テキスト

使徒言行録 1章6～11節

参照教理問答

子どもカテキズム 問26

ハイデルベルク信仰問答 問46～49, 問76

〈聖書テキストの解説と黙想〉

ルカによる福音書は、復活のイエスが、弟子たちに証人となるために聖霊を送ることを約束し、そのためにエルサレムに留まるようにと勧め、そして昇天していかれる場面を描いて閉じられる(24:44～53)。

使徒言行録は、この部分を更に詳細に描くことから始まる。復活させられたイエスは、40日の間弟子たちの前に現れ、神の国について教え、聖霊が与えられることを約束し続ける(1:3～5)。

その上で、イエスの昇天が描かれる(6～11)。しかしここで描かれるのは、単に天に昇っていかれるイエスだけではない。

最初に描かれるのは、復活のイエスにお目にかかり、直接の教えを受け続けている、使徒たちを代表とする弟子たちの無理解である。彼(彼女)らはなお、「主よ、イスラエルのために国を建て直して下さるのは、この時ですか」と尋ねるのである(6)。「大喜びで……神をほめたたえていた」(ルカ24:52)状態にいたるまでには、イエスの導きが必要だったのである。

十字架の死を打ち破る復活の力が、どのような形を取るのか。それは、今ユダヤ民族となっている神の民イスラエルの、国家としての再興という形を取るのではないか。

しかしイエスは、この弟子たちの問いを退けられる。弟子たちが見つめているのは、今という時と今を生きる自分たちであったが、イエスが見つめておられるのは、父が権威を持って定められた時と、そこに生きる壮大な神の民なのである(7, 8)。

使徒たちを代表とする弟子たち(すなわち教会)に委ねられるのは、聖霊を与えられて、十字架と復活の主、イエス様の証人となり、神のご計画に仕える者として生きる権威である(9)。

イエスは、使徒たちを代表とする弟子たち(す

なわち教会)の無理解を退けられ、確かな約束を与えて、天に昇っていかれたのである。

しかもこの聖書テキストには、天に昇っていかれるイエスについて、「白い服を着た二人の人」が現れて証人となる。もちろん、この「白い服を着た二人の人」とは、復活のイエス様を指し示したあの二人である(ルカ24:4)。

この天からの証人は、天に昇っていくイエスを見つめ続ける教会に向けて、明確な宣言を行う。「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる」(11節)。

前提として確認しておかなければならないが、復活のイエスとは、十字架の御傷をお持ちのイエスである。イエスは復活の後、弟子たちに現れた時、「わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ」と言われた(ルカ24:39)。これは、亡霊だと考えていた弟子たちに、生きていることを指し示すためだけに言われた言葉ではない(参照ヨハネ20:24～29)。

そのことを踏まえた上で、この約束には、3つの重要なポイントがある。第一に、イエスは、聖霊を与えて下さることによって、私たちの心の内に住まわれる。私たちが信仰の目をもって仰ぎ見る、あの十字架と復活のイエス様ご自身が、「またおいでになる」のである。そして、聖霊によって私たちの内に住まわれるイエスは、私たちを清め、いよいよ御自分とひとつに下さるという仕方でお働きになり、私たちを御自分に引き寄せて下さる。

第二に、聖霊において共にいて下さるイエスは、確かに天におられるお方でもあるのである。「あなたがたから離れて天に上げられたイエス」と言われている通りである。そして、天におられるイエスもまた、十字架の御傷をお持ちのイエス

なのである。天に昇られたイエスは、父なる神の右に座して、王として即位し、裁き主となられた。しかしその裁き主であるお方が、私たちのために十字架で裁かれたイエスであって、しかもなお十字架の御傷を指し示しながら、父なる神様に執り成しの祈りを続けておられるのである。これ以上に深い、私たちの日々の生活への慰め、また残る罪との戦いへの励ましはない。

第三に、天に昇っていかれたイエスは、聖霊によって、私たちと共にいてくださるだけではなく、再び決定的においでくださるお方でもある。聖霊を与えられて復活のイエスの証人とされた教会による福音の告知によって、神の国は進展する。そしてやがて「父が御自分の権威をもってお定めになった時や時期」が来て、神の国が完成するとき、イエスは再びおいでになる。再臨の約束である。私たちはその日、イエスが復活なさったように、それぞれに背負ってきた十字架の傷を持ったまま、復活するのである。

今日の説教では、特に11節で語られている約束の第一と第二の点に絞って、福音を語りたい。

〈カテキズムの解説と黙想〉

今回の聖書箇所黙想のために、子どもカテキズムでは、問26を取り上げた。この後半部分で、天に昇られたイエスが、今も「御父の右に座して」（すなわち王として）、「私たちのために執り成しの祈りをささげていてくださる」ことが教えられる。

しかし何よりも、イエス様が天に昇られたことが、私たちにとってどのような益があるかを、味わい深い信仰の言葉で言いあらわしているのは、ハイデルベルク信仰問答の問46から問49、分けても問49である。

問49が言いあらわすのは、3つのことである。第一に、天におられるイエスが、御父の面前で私たちの弁護者となってくださること（子どもカテキズム問26と同じ）。第二に、十字架の御傷をお持ちの復活のイエスが天におられることは、私たちの復活の確かな保証であること。第三に、天におられるイエスは、聖霊を注いで、私たちを御自分のもとへと絶えず引き寄せてくださること。

特に、第二点と第三点を黙想するときには、主の晩餐について信仰を告白する問76をも、合わせて読みたい。主の晩餐のお恵みは、「キリストのうちにも、わたしたちのうちにも住んでおられる聖霊によって、その祝福された御体といよいよ一つにされてゆく、ということです」と言われる。

「一つにされてゆく」とは、霊的な意味でだけ言われるのではない。「それは、この方が天におられ、わたしたちは地にいるにもかかわらず、わたしたちがこの方の肉の肉、骨の骨となり」とあるように、私たちの魂も体もすべてが、天におられるイエスとひとつとされていくことなのである。

天に昇られたイエスは、聖霊を注いで、私たちと今既にひとつとになってくださる。そしていよいよひとつとになってくださる。私たちのために執り成し、私たちの心をご自分へと向けさせ、それぞれの十字架を背負ってイエス様に従う私たちをご自分の復活と栄光の御姿へと造り変えることで、ひとつとし続けてくださるのである。

〈子どもたちへ〉

弟子たちは、「イエスが離れ去って行かれるとき、彼らは天を見つめていた」（10節）。復活のイエス様が天に昇っていかれる。そのお話を語り出すだけで、子どもたちもやはり「天を見つめる」ことになるだろう。

日曜学校教師である私たちに委ねられているのは、天からの二人の証人と心を合わせてイエスが天に昇っていかれたことの意味を語りかけることである。

そのとき子どもたちは、天におられるイエスが、十字架の御傷を指し示しながら、どのようにこの私のために父なる神の御前で祈っておられるかを知るようになるだろう。聖霊によって共にいてくださるイエスが、ご自分と更にひとつにするために、今どのようにこの私のために働いておられるかを、知るようになるだろう。

それは一言で言えば、天におられるイエスが、その力強い御手をもって、私たちをご自分の肉の肉、骨の骨として愛し守って、更に天におられるご自分の御許に引き上げていてくださる、ということである。 (安田直人)

テキスト 使徒言行録 1章6～11節
子どもカテキズム 問26

〔単元のねらい〕

十字架に死なれ、復活なさったイエスさまは、天に昇っていかれた。このイエスさまの「昇天」の出来事を見つめた弟子たちは、「イエスが離れ去って行かれる」と感じ、「天を見つめていた」。そのとき、天からの証人二人が現れて、イエスさまが天に昇っていかれたことの意味を説き明かした。この説き明かしに従って、天におられるイエスさまのお働きを、子どもたちと共に見つめて慰めを得たい。

イエスさまは天で何をしておられるの？

イエスさまは、私たちの罪を背負って、父なる神さまの刑罰をその身に引き受けられて、十字架に死んでくださいました。

十字架に身代わりになって死んでくださったほどの、私たちへの愛。迷子の一匹の羊を探し回るほどの、父なる神さまの御心を実現したその愛。そのイエスさまの愛を見つめて、父なる神様は、大きな力を振られました。

イエスさまを墓からよみがえらせられたのです。死んだ人が生き返ったのでありません。神さまの御怒りを受けて滅んだ滅びの中に、神さまを愛し、隣人を愛して生きる、本当の神さまの子どもとしての新しいお命が生まれたのです。

イエスさまを信じると、イエスさまはご自分と私たちを、ひとつに結び付けてくださいます。イエスさまが、こう教えてくださったのを覚えていますか。「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」。ぶどうの木と、その枝。ひとつに、しっかりつながっていて、ぶどうの木であるイエスさまの何もかもが、枝である私たちの中に満ち溢れるんですね。

ですからイエスさまを信じると、罪はぜんぶ赦されます。もう罰は終わったからです。イエスさまの十字架の御傷を見ると、そのことが良くわかります。

ですからイエスさまを信じると、私たちはイエスさまと同じ、神さまの子どもとなります。イエスさまの復活のお命、本当の神さまの子どもとし

ての新しいお命が、私たちの内に流れるようになるからです。

そのように私たちのために十字架に死なれ、私たちのために復活させられたイエスさまは、復活なさったあとには、どうなさったのでしょうか。

今日読んだ聖書に書いてあったとおりです。イエスさまは、弟子たちと40日の間共に過ごされましたが、そのあとで、最後の約束をお語りくださいました。「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる」。

この約束を語り終えられると、イエスさまは、天に上げられた、と書いてあります。天に上げられる。そのとき一緒にいた弟子たちからは、離れ去っていかれたのです。そのときの様子が、このように語られています。「イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった」。

私たちの生きているこの地上から、天に昇っていかれる。それは、空高く飛んでいかれたとか、雲の上の宇宙にいつてしまわれたという意味ではありません。私たちは、「天のお父さま」とか「天にいらっしゃいます父なる神さま」とお呼びして、お祈りを始めます。天とは、父なる神さまのおられるところですね。

イエスさまが天に上げられる。それは、十字架

と復活という、私たちが罪赦されて、神さまの子どもとして生きるために必要なすべてのことを成し遂げられて、父なる神さまの元に帰っていかれた、ということです。

イエスさまは、私たちから離れ去ってしまわれたわけではありません。イエスさまが、天に上げられたとき、あの復活のときにも現れた、天からの二人の御使いが、弟子たちに現れて、こう教えてくれました。

「イエスさまは、あなたがたから離れ去ってしまわれたわけではありません。イエスさまは、あなたがたと一緒に過ごした復活のお姿のまま、またおいでになられますよ」。

そうです。イエスさまは、天におられますが、またおいでくださったのです。イエスさまは約束のとおり、天から、父なる神さまと一緒に、私たちの心に聖霊を住み込ませてくださいました。そして聖霊は、イエスさまの霊ですから、聖霊が住み込むということは、イエスさまが住み込んでくださっているのと同じです。

すべてを成し遂げて天におられるイエスさまが、いつでも私たちと一緒にいてくださる。あの十字架の御傷をお持ちのまま、復活の御体をお見せくださって、罪赦されて、神さまの子どもとなって生きる喜びを教えてくださいましたイエスさまが、いつも私たちと一緒にいてくださる。何と嬉しいことでしょう。

それだけではありません。私たちの心の中に住み込んでいてくださるイエスさまは、やはり、天にもおられるのです。それは、いつも父なる神さまと一緒におられる、ということです。

イエスさまは、父なる神さまの御前で、何をしておられるのでしょうか。イエスさまは、聖霊によって、私たち一人一人の心に住み込んでくださっているのです。私たちのすべてをご存じです。

きっとイエスさまは、私たちがしてしまったあの悪いこと、私たちが言ってしまったあのいけない言葉、心の底にしまいこんでいるあの憎しみ、そういうことだけではなくて、すべてをご存じな

のです。とても複雑なからみあっていること、私たちには解きほぐせないこと、私たちにはわからないような罪。

そしてイエスさまは、ご存じのすべてのことについて、いつも一緒におられる父なる神さまに、執り成してくださるのです。

「天のお父さま。どうか、私を見てください。この十字架の傷を見てください。今、地上に生きているあの子どもたちのために、十字架に苦しみを受けて、滅びの死を死んだ、私の魂と体を見てください。あの子どもたちの罪への刑罰は、すべて終わっています。あの子どもたちは、十字架に死んで、復活した私とひとつなのです。今、あの子どもたちは、神さまの子どもとなっています。どうか、あの子どもたちの罪ではなく、私とひとつとなっているあの子どもたちの、神さまの子どもとしての命を見てください」。イエスさまは、毎日、そのように執り成してくださっているのです。

そしてイエスさまは、父なる神さまに執り成してくださるだけではなくて、聖霊によって私たちの心に住み込んで、私たちの魂と体も、新しくしてくださいます。

ぶどうの木に、枝がしっかりと結び付いてひとつとなっているように、元気がなくなって葉っぱがしおれたり、ぶどうの実がならないようなことがないように、イエスさまは、いつもご自分の命を注ぎ込んでくださるのです。

そうすると、私たちは、イエスさまとひとつにされていますが、いよいよひとつにされていきます。ぶどうの枝が、ぶどうの木の一部として、しっかりと太くなっていくように、イエスさまといよいよひとつにされていくのです。イエスさまに似た者へと変えられていくのです。

イエスさまは、天におられ、私たちは地にいますが、イエスさまと私たちは、聖霊によって結び合わされています。そしてイエスさまは、いつも愛してやまない私たちが、ご自分ともっとひとつになるように働き続けていてくださるのです。私たちはイエスさまのものです。 (安田直人)

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書 15章5節前半

わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。

〈ねらい〉

イエスさまは、天で今も私たちのために生きて働いておられるお方であることを知る。

〈展開例〉

・おはなしのヒント

復活したイエスさまは、ある日、弟子たちの目の前で天に昇って行かれました。天高く昇っていかれ、段々とイエスさまのお姿が小さくなっていきます。そして、やがて雲に覆われて見えなくなってしまうのです。そのような光景を想像しながら、やはりある寂しさというのが生じてきます。

イエスさまとお別れして、もう会うことができないのだと……。

そのような悲しげな思いで天を見上げている私たちに白い服を着た二人の人が語りかけます。「なぜ天を見上げて立っているのか……」と。イエスさまのおはなしをずっと聞きながら、どうしてイエスさまは私たちの前にあらわれてくださらないのだろう。どこかに行ってしまうのだろうか。もうお会いすることはできないのだろうか。素朴な疑問をどうしても抱いてしまいます。もしからしたら、イエスさまは昔の人で、もう死んでしまったのだと誤って理解している子どもたちもいるかもしれません。

でも、イエスさまは、今も天において生きておられるのです。天とは、空の上や宇宙のことではありません。だから飛行機に乗ってもイエスさまに会うことはできません。天とは神さまがおられるところです。そしてその場所を私たちの目では見ることはできないのです。でも、聖霊をとおしてイエスさまが生きておられること、イエスさまが私と一緒におられることが分かるように導いて

くださいます。

そして、天におられるイエスさまは、何もしておられないわけではありません。もうわたしの仕事は全部終わったのだと言って、天に帰って行かれたわけではないのです。いつも私たちのことを心に留めてくださっているのです。地上におられたとき、弟子たちや病気の人や貧しい人や罪人たちのことをご覧になって、手を差し伸べてくださったように、天においても同じように私たちのために働いてくださっているのです。いつも私たちのために、この世界のためにお祈りをしてくださっているのです。

だから、天を見て、寂しいなど思うのではなく、やがて必ず来てくださるイエスさまのことを信じて、希望をもって歩いていきましょう。元気になれないときもあるかもしれませんが。お友だちと喧嘩して嫌な思いをしたり、反対に嫌な思いをさせてしまって心が苦しくなることもあるかもしれませんが。でも、イエスさまがお祈りしてください。「どうか私の十字架のゆえにお赦してください。この子が元気になることができるように助けてください」と。だから、この世界で生きていけるのです。

イエスさまが今日も天にいてくださいます。今日も皆のことを心配していてくださいます。イエスさまに「ありがとう」と感謝をして歩いていきましょう。

〈祈り〉

天におられるイエスさま、今日も私のために神さまにお祈りしてくださってありがとうございます。こらからもずっとイエスさまを信じて歩むことができるように力を与えてください。

〈展開例〉

1. 今週の暗唱聖句を一緒に読みましょう。

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。」ヨハネ15:5前半

・イエス様の時代にはぶどうの木がまわりによくありました。このたとえて、どうしてお弟子さんがぶどうの木でなく、イエス様がぶどうの木なのでしょう。

→お弟子さんたちがイエス様に繋がっていません。はならないから。イエス様が実を实らせる栄養のもとだからです。

2. 説教を分かち合う。

2-1. イエス様のことを考えよう。

- ・イエス様が天に昇られたのはなぜですか。
- 地上でイエス様がする働きが全部終わったからです。し残しはありません。
- ・地上でのイエス様の働きは何ですか。
- 私たちが救われるために必要な働きです。それは、十字架と復活でした。
- ・十字架が終わったということは、どういうことですか。
- イエス様を信じる人の罪に対する罰が終わったということ。
- ・イエス様が天に昇らずに、地上でお弟子さんたちと一緒にいて、さらに聖霊を遣わしてくださいと思いませんか。
- 聖霊はイエス様が天から遣わしてくださいます。だから、イエス様が天に昇る必要がありました。聖霊が遣わされた後の時代を聖霊の時代といわれます。
- ・イエス様は地上の働きを終えて、もう働いておられず、休んでいるのでしょうか。
- 地上の働きが終えたら、次に、天での働きをなさっています。天で父なる神様と一緒にいて、ご自分の十字架の業を果たしたから、クリスチャンの罪を赦してくれるように、と父なる神様に働きかけてくださいます。父なる神様はイエ

ス様の願うことを何でも聞き入れてくださいます。イエス様は天で今も働いておられるのです。

2-2. お弟子さんたちのことを考えよう。

・イエス様が天へ上られ、姿が見えなくなったとき、また寂しい思いになったかもしれません。でも、お弟子さんたちは元気をだすことができました。どんなことを新たに知らされたからですか。

→イエス様がまた天から来られること。しかも、天に昇って行かれたのと同じ有様で、です。

・イエス様が天に昇られた後、お弟子さんたちはイエス様のどんな言葉に従いましたか。

→使徒言行録1章4節から5節参照。

2-3. わたしたちのことを考えよう。

・聖霊はイエス様と違うのですか。

→もし全く違う霊なら、イエス様の思いと違うことをします。でもイエス様の思いどおりのことをなさる霊です。それはイエス様が私たちに命じたことをできるようにしてくださる霊ですから、イエス様と一つです。

・聖霊もいよいよやっぱり見える仕方でイエス様と一緒にいたい……という人のために。

→私たちの思う仕方でイエス様と一緒にしようとしても、それは一緒にいることにはなるとは限りません。(場合によっては偶像礼拝かもしれない) 大事なことは、イエス様の思う仕方で私たちが一緒にいることが、本当の意味でイエス様と一緒にいることとなります。今、イエス様は、聖霊によって私たちと共にいるということをお望みになりました。

・イエス様は私たちをどのようになさろうとしているのですか。

→「わたしの証人となる」と言われたように、イエス様の証人にし、いつもイエス様が共にいることを教えてくださいます。